

『うつほ物語』 祐澄と近澄

—— 繰り返される（あて宮求婚譚） ——

猪 川 優 子

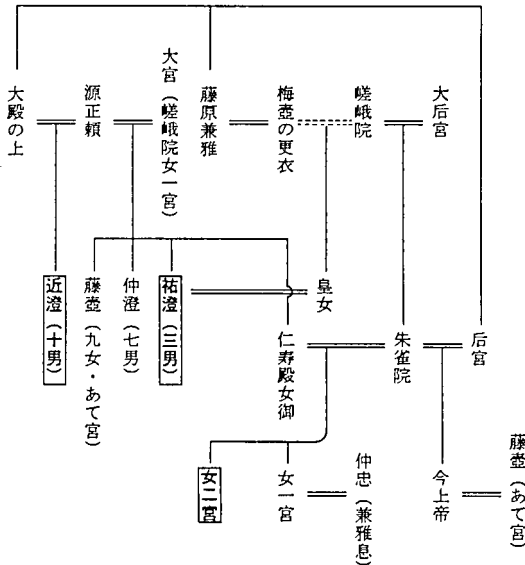
はじめに

国譲・下巻の終盤、源祐澄と近澄によって朱雀院女二宮略奪未遂事件が引き起こされる。新帝が即位し立坊問題にも決着が付き、漸く世の中が平穏を取り戻した、その翌年の出来事であった。事件の舞台となったのは、仲忠に降嫁された姉女一宮の出産の場である。この女一宮の出産も、物語始まって以来未曾有の難産であり、不吉さを暗示させるのであるが、⁽¹⁾ 出産に乗じた女二宮略奪未遂事件もまた、新たな不穏の兆しを感じさせるものであるといえる。

いったい、新しい御代の幕開けに起きたこの事件が持つ主題性とは如何なるもののだろうか。本稿では、一見挿話的に描かれているこの事件が、実は物語内部で有機的な繋がりをもっている事を明らかにするものである。更に長編物語を編む際の、主題の在り方の問題として捉え、物語前半部と後半部の繋がりに迫りたいと考える。

一 源祐澄と近澄

源祐澄と近澄は、いずれも左大臣源正頼の息である。祐澄は、大宮（嵯峨院女一宮）腹の三男、近澄は大殿の上（兼雅姉）腹の十男である。次に、ごく簡略な人物系図を掲げる。



まず祐澄と近澄の物語前半部における位置付けを確認する。祐澄は、仲澄や藤壺（あて宮）を同腹の兄弟に持つ。藤原の君巻で右近中將・藏人の頭として物語に登場し（この時仲澄は侍従）、物語前

半部では仲頼や行正、仲澄、仲忠たちとともに貴公子の一人に数えられる人物であった。また次に掲げる祭の使眷冒頭では、賀茂祭の奉幣使を務めており、正頼や大宮の目にも頼もしい息子として映っていた。

かくて、^{正頼}殿より、祭の使出で立ち給ふ。近衛府の使には中將^{中將}の君、内蔵寮の使には内蔵頭かけたる行正、馬寮のには式部卿の宮の右馬の君と出で立ち給ふ。あるじのおとど、この三所の使を勞り出だし給ふ。皆出で立ち給ふに、父おとど、使の中將に挿頭奉り給ふとて、

二葉なるまつら桂と見しものを挿頭折るまでなりにけるかな

使の中將、

もと見れば高き桂も今日よりや枝劣りすと人の言ふらむ

とて出で給ふに、桂より、左大將^{左大將}ぬし、よき御馬二つ、一つは飾り、一つは設けの御馬にて、舍人三十人、えも言はず装束かせて、採物せさせて、金の枝に小さき壺をつけて、それに桂川の水を入れて、仲忠して、

「挿頭取る袖の濡るるは白波の桂川より折れるなりけり

これにさへ、あやしう」とのたまへり。使の君、かく聞こえ給ふ。

「みなかみに挿頭しつるかな桂川今日ひとなみの心地のみし

けふはくれにのみなむ」と聞こえて、出で立ち給ひぬ。

大宮、「使の君見給はむ」とて、車十ばかりして出で立ち給ひぬ。〔祭の使・203頁〕

この日、左大將兼雅も祐澄に豪華な品を贈っており、仲忠を通じて歌を遣り取りしている。この時点で祐澄は、侍従仲忠を遙かに凌ぐ人物なのである。

しかし物語が進むに従って、祐澄の負の側面が強調されるようになるのである。その負の側面とは、祐澄が持つ色好みの性質に起因する。祐澄の色好みが具体性をもって語られるのは、(あて宮求婚譚)においてあて宮の春宮入内が決出し、求婚者たちが悲嘆にくれる最中、夫に顧みられなくなった源実忠の妻に懸想するという話題をもつて始まる。

かくて、男もなき所に、つれづれと眺めわたり給ふ。この北の方、昔より、かたち清らに、心ある名取り給へり。娘の君も、よきほどにてもし給へば、よろづの人聞こえ給ふ中に、左大將殿の中將の君・兵衛督の君、式部卿の右馬頭の君など、この北の方を、切に聞こえ給ふを、近くて見給ふこと、かけてなし。

〔菊の宴・329頁〕

この時祐澄の懸想は、特に発展をみせない。ここで注目したいのは、祐澄の色好み(あて宮求婚譚)の収束に伴って語られ始めるという事実である。

一方近澄は、その若年さゆえに物語前半部では特に注目されない。

近澄が實質的に物語に加わってくるのは、次の、涼長男誕生の産養の時である。

故侍従（御弟）の御弟、大夫なりしは、内蔵頭にて、蔵人にぞものし給ふ、故侍従には、かたちも心もまさりたる、類なき色好み（色好み）にぞありける、
〔蔵開下・581頁〕

この時近澄は、へあて宮求婚譚で同腹の妹あて宮への恋情よつて命を落とした仲澄よりも一段、容姿・心映えともにすぐれた人物に位置付けられている。また、類い稀なる色好みとしても名を馳せている。特に同じく色好みとして名高い兼雅は、近澄を「弟まさりになり分かれぬべかめるかな。ただ今の上の人は、これ一人なめりかし。心もよげなり。」（蔵開下・600頁）と褒め称えるのである。

祐澄も近澄も、将来有望な貴公子として物語に登場し、仲澄亡き後の家を負つて立つてであろうことを予感させる。ここには、後に二人が引き起こす女二宮略奪未遂事件の影はみられない。また両者の色好みについても、物語前半部ではさほどの危険性は窺えない。では、物語後半部では二人はどのように描かれるのであろうか。続いて、女二宮略奪未遂事件の経緯をみる。

二 女二宮略奪未遂事件

蔵開・上巻、祐澄が仲忠の妻女一宮に横恋慕している事が明かされる。

この君、一の宮を、「いかで」と思しける、今は、かの君を、

「いかで」と思せど、聞こえ寄るべくもあらねば、心一つに思す。
〔蔵開上・516頁〕

祐澄は、以前から女一宮に恋情を抱いており、しかし仲忠に降嫁された今となつては表立つて求婚する事が出来ず、密かに思い続けているというのである。この場面は、次の正頼と大宮との会話に対応している。

おとど、この朝臣、そそめきたりけるは、『いとまめなり』と見るものを、なんと、戯言は多くしつる。宮、「ある人をぞ、年ごろ、気色ありて聞こえけるや。それを、『今は』と思ひて、言葉散らすなめり」。おとど、「うたて、疎からぬ仲らひなるに、かかることどもありけること」とのたまふ。

〔蔵開上・516頁
517頁〕

祐澄が立ち去つた後、正頼と大宮は祐澄の色好みを嘆く。Aとa、Bとbはそれぞれ照応しており、女一宮が仲忠に降嫁されたことで祐澄に鬱屈した思いが残っていることが窺える。そして祐澄の息子宮はたは、父の女一宮思慕を知っており、仲忠の女一宮宛の手紙を運ぼうとする。

宰相（中將）の中將の君の御子、宮はたといひて、八歳ばかりにて、殿上にあり、それ、「まろを使ひ給へ」とて奪ひ取れば、「など、かくはのたまふ」とのたまへば、宮はた、「宮の御もとなれば」と言ふ。大將、「それをば、など」とのたまふ。「父君の思ひ奉れ給へば、まろも」とて取りて、殿上口に立てる侍の人に

一取らせう。

〔蔵開中・538頁〕

宮はたは、父祐澄の想い人であるからという理由で、女一宮への手紙を取ろうとする。さらにその後、仲忠と宮はたとの会話の中で祐澄の女一宮思慕は明確にされる。

大将、「など、父君は宮をば思ひ奉り給ふぞ。」いさ。南の方に出で居て、『よそ人に見なし奉りつる』とて、泣きなどこそし給へ。大将、『いつれの宮を』とかのたまふ。宮はた、

「そこを措いて、いづれかは。」わか」と言へば、「内裏の上の御もとにまうづれば、いと清らにて、常に見え給ふぞかし。大将、「などて、それをば思ひ奉るぞ。『見奉らむ』とや」と言へば、「さかし」と言ふ。「さて、御文は取り入るるか。宮はた、「さてかし。大将、いみじう笑ひて、「我得させむよ。物な思ひそ。(略)」

〔蔵開中・543頁〕

宮はたは仲忠に、宮が他の人に降嫁されたので祐澄が泣いていたと告げる(ア)。仲忠がどの宮なのかと尋ねると、宮はたは(あなた)の妻の)女一宮以外に誰がいるのかと断定し(イ)、仁寿殿女御の許で見た女一宮の美しさを強調する(ウ)。ここでは祐澄が度々女一宮に手紙を贈り、女一宮が拒絶していた事も明かされる。

祐澄の女一宮思慕は、手紙以上の発展をみせない。仲忠に発覚したことによって終止符が打たれたのであろうか。物語としてもそれ以上の展開は計画していなかったことが窺える。そして祐澄はここで、女二宮略奪へと方向転換するのである。

近澄の女二宮思慕は、兼雅と仲忠の会話の中で明らかにされる。

大将、「(略)少将は、あるまじき心ばへなれば、親など制し給ふなれば、」さて、仲忠侍らすや」とものすなれば、『それは、不意に賜へばこそあれ。きんぢは、いかなる道、何によりて』となむ、切に責め給ふなれど、思ひやまでなむ。『心地も痴れぬべきものなめり』となむ嘆かる。(略)おとど、「例なることなれば、げに、嘆かれぬべくこそは。いづれをかは。大将、「二の宮こそは。ここ、装着給ひて、そは、いまだ小さくなむ。おとど、「御かたちなどは、いかがはものし給ふらむ。』大将、「かしこきは、『我は人か』とのみあるは、まさり給へるにこそ。』

〔蔵開下・600頁〕

近澄には「あるまじき心ばへ」皇女への懸想心」があり、仲忠が女一宮を降嫁されたことを前例に、自分にもと切望するのである。近澄は、仲忠が特例であるという正頼の叱責にも耳を貸さない。近澄の懸想相手は漸く装着を済ませた女二宮である。仲忠は女一宮の言葉からその美しさを推測する。

蔵開の巻々で徐々に不穏な動きを見せ始めた祐澄と近澄は、国譲の巻に入り、ついに暴挙に出る。国譲・上巻、近澄への周囲の不安は高まる。大宮は、近澄の色好みを次のように嘆く。

宮、「世の中に苦しかるべきものは、若き人の好いたる、子にて持たるわざなりや。見苦しういみじきものを見るこそ、いと命長くなりなまほしけれ。この近澄といふ人の、童より、あや

しく好きて見えしかば、『そへ物になりぬべし』とて、かしこにも許し給ばでありし者の、人定めてありしかば、『目安し』と見しを、いかがしけむ、そこにもあらで、ただかなたにのみありて、をのれかせんなにわびぬ。その言ふやうは、『心一つに、え堪へずは、いかにもいかにも』と思へども、親の先に命なき人あらはなれば。かく申すに、そのごとくなし給へとは

あらず。「仏神にも、このこと、な思はせ給ひそと申させむ」などこそ』など言ひつつ。常に喜び楽しむを見るこそ、いと世に経まほしけれ』と聞こえ給ふ。〔国譲上・637頁〕

大宮は、正頼が定めた妻の許に近澄が居着かない事を仁寿殿女御や藤壺にこぼし、更に、近澄の女二宮思慕が明かされるのである。大宮は女二宮を心配する仁寿殿女御に、女二宮を女一宮の許へ預けるよう助言する。

近澄は大宮や仁寿殿の心配通り、徐々に女二宮への接近を図っており、次の場面では女房を買収する様子が描かれる。

蔵人の少将、「いかで」などは思せど、男宮おはしまいて、いささか気色ありて、物聞こゆる御達もあれば、気色悪しくてのたまへば、物聞こゆる人もなし。この君たちは、皆御達につきて、物を取らせつつ、「盗ませ奉れ」とのたまふもあり。蔵人の少将、中納言の君とて、御身につき仕まつる人に、よろづの宝物を取らせ給ひつつ、「盗人に入れよ」とのたまへど、さるべき折もなし。「いかならむ隙に入らむ」と窺ひ給ふ。

近澄は中納言の君に金品を贈り、略奪に入る隙を窺う。ここでは、複数の男たちが同じように買収している様子がみられ、求婚譚の様相を呈していることにも注意される。

その中で祐澄もまた、女二宮の乳母に賄賂を贈る。

宰相の中將の君の御もとより、二の宮の乳母のもとに、女の装ひ一領・白張の一重襲包みて、御文あり。「昨日のつとめて、消息聞こえたりしかど、急ぎて出で給ひにければ。かの聞こえしこと、宮にてはいと難かるべきことを、宮たちも御遊びせさせ給ひて、川ほとりに涼み給ふめる宵の間にたばかり給へ。昨日のつとめて、追ひ出でまうで来て、このわたりになむ、さる心して侍る。さて、これは、いと暑き日なめるを、脱ぎ替へ給へ」とあり。乳母、見て、「あな恐ろし。人もこそ、気色見れ」とて、「里より、洗ひに遣りたりし物、汚い物引き入れて持て来たり」とて、隠して、御返り、「かしこまりて承りぬ。昨日は、左のおとど参り給ひて急がし聞こえ給ひしかば、いとく出でものし給ひしなり。のたまはせたることは、あな恐ろしや。宮におはします時よりも、宮たち、垣のごとおはしますひて、夜は御巡りにおはしますまふめれば、これかただに、え近くも参らずなむ。いとかたじけなく、旅におはしますさすなるを、はや帰らせ給ひぬ。人に、気色見えさせ給ふな。さて、賜はせたる物は、あなかたじけなや。かく御匣殿をせさせ給ふをなむ。

『いかで、この功に、女設けさせ奉りてしがな』とぞ、人知れず。まめやかに、宮に渡らせ給ひなむ』と聞こえさせつ。

〔国譲中・724頁〕

この場面には、女二宮の乳母が祐澄の手引きを承諾したことが描かれている。この買収は後に女一宮の乳母によって発覚する。

左近の乳母といふ、騒がしげなる気色にて出で来て申すやう、

「いと恐ろしきことをこそ聞き侍りつれ。二の宮の越後の乳母は、『宰相の中將に盗ませ奉らむ』とたばかりて、多くの物賜はりにけるは、大きなる瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に絹・綾入れてこそ賜はりにけれ。かかること知りたる下衆を、はかなきことにてうち追ひ出でければ、腹立ちて言ひののしりければ、皆人聞き侍りつ。さきさきも、多くの物得てけり」と聞こゆ。

〔国譲下・815頁〕

女二宮の乳母は、下衆から聞いた買収の話を大官たちに語る。祐澄が女二宮の乳母に贈った賄賂は極めて高価な品であったことが傍線部から窺えよう。しかし祐澄は、女二宮の周囲が騒がしいことに對して、表面上無關係を装っている。

宰相の中將、うち笑ひて、「聞こし召し懲りたることやあらむ。

さやうに好いたる人も、今は侍らぬものを」と、つれなく言ふ。

下には、「いかで、この折に盗まむ」と思ひたばかり。藏人の

少將は、物も言はず、「下りて入り給ふらむほどに、入り臥しなむ。そゑに殺されむやは。また、さらば、さて死なむ」と思

ひおはず。

〔国譲下・804頁〕

ただし内面では略奪の決意を固めており、ここに人格の裏表が明確化されるのである。

祐澄と近澄は、女二宮が女一宮の居所へと退出する時を狙って略奪を執行しようとする。

大將、宰相の中將、藏人の少將のなきを、「これは、皆、疑はるるやうあらむ。ここをば離れぬからぞ、わづらはしき」と思ほして、御車を引き別れて、走り先立ちて、宮に下りて、入りて見給へば、宰相の中將、かかるわざのために、片時に千里行く馬立て飼ひ給ひけるに、鞍置きて、やむことなくむつまじう仕うまつり給ふ四人、狩衣に藁沓履きて、隠れ立ちたり。

「をかし」と見て、上に上りて見給へば、御車寄するほどにありて、立給へり。見ぬやうにして入りて、紙燭をさして入りて、御帳の内外の辺を巡りて見給へば、藏人の少將、直衣姿にて、壁代と御障子との狭間に立てり。「いとをかし」と見て、待ち奉り給ふに、おはし着きぬ。

〔国譲下・806頁〕

祐澄は駿馬と供人四人を用意して隠れ、近澄は壁代と御障子の狭間に隠れるが、共に仲忠に見破られる。仲忠が一枚上手であるという様子は、「をかし」という目線にあらわれ、祐澄と近澄の滑稽さが強調されている。

宰相の中將、「この大將、今日、盗人の気色を見てするにこそあらめ。宮たちもおはせで、いとようたばかりつべかりつるも

のを」とて、齒噛みをして出でぬ。少将も、すべり出でて往ぬ。

〔国譲下・806頁〕

祐澄は自らを「盗人」と称する。この場面に限らず女二宮略奪事件では、「盗ませ」や「盗人」といった「盗」字が多用されている。これは、この事件に負の印象を与える一因ともなっており、そのまま祐澄や近澄への評価にも繋がっているといえよう。

三 〈あて宮求婚譚〉の負の継承

物語後半部では、かつての〈あて宮求婚譚〉の求婚者たちが救済されていく。蔵開・上巻、仲澄の死を悼んで追善供養が営まれるのであるが（517頁）、追善供養に至る会話の中で、藤壺が罪の意識にさいなまれていたことが明かされる。

「いで、されど、いとよく知りて侍り。さは聞こえむに、侍

従の上に侍らずや。常に、さ見給へき。御徳に損ひ給ひてし人ぞかし」。女君（女君）、「常に、夢にぞ見え給ふや」とのたまふまに、

泣き給ふ。

〔蔵開上・514頁〕

藤壺は祐澄の問いかけに対して、いつも夢に仲澄が現れることを告白し、涙にくれる。仲澄の死は大宮や正頼の間でも話題にされるが、正頼は仲澄の相手を女一宮と誤解している。さらに実忠も妻子と和解し、藤壺と手紙を遣り取りする仲になる。藤壺は実忠のために昇進の後押しをし、実忠は新中納言として復帰を遂げる。また水尾に隠棲している仲頼の許にも仲忠や涼を始め君達が訪問し、仲頼は妻

と手紙を交わす。さらに滋野真管は、あて宮の春宮入内を知って激怒し狂態を晒した上に、帝に「言ふ限りなくさがなきこと」を書いた直訴状を渡し、一族ともども罰せられたのであるが、正頼の取りなしによって息子たちが恩赦される。

左のおとど（おとど）、よき折に奏し給ふ、「この放ち遣はしてし滋野真管は、賢しき人に侍りしかば、その罪を後までは蒙り侍るまじかく御世の初めなどは、天下の罪ある者を許させ給ふなる。あの男子どもがあはれにて侍るなる。召しに遣はさむは、いかが侍らむ」。上、「ともかうも知らざりしことなり。これかれ、よろしう定められて、あるべからむやうにものせられよ」とのたまへば、喜びて、皆召しに遣はす。〔国譲下・801頁〕

〈あて宮求婚譚〉は、蔵開から国譲の巻々にかけて修復されようとしていることが窺える。その一方に置かれる祐澄と近澄の女二宮略奪未遂事件は、かつての〈あて宮求婚譚〉にみられた好色性・暴力性を髣髴とさせるものではないだろうか。加藤昌嘉（昌嘉）氏は、祐澄・近澄に仲澄の姿を重ねる。しかし祐澄と近澄の事件は、妹あて宮に恋をして命を失った仲澄の件に限定出来ない危険性をはらんでいる。礎に仲澄は随所で語られるが、仲澄は〈あて宮求婚譚〉を引き出す導入にはなるが、仲澄の要素がすべて祐澄や近澄と重なるわけではない。では、祐澄や近澄が全く独自な人物造型から成り立っているのだろうか。ここで〈あて宮求婚譚〉の修復がすなわち〈あて宮求婚譚〉の想起に繋がることから、〈あて宮求婚譚〉そのものを振り

返つて考える。(あて宮求婚譚)の中で(略奪未遂事件)として挙げられるのは、上野の宮によるあて宮略奪未遂事件である。この時正頼は事前に略奪計画を知り、偽あて宮を用意することで切り抜ける。この上野の宮についても国譲・上巻で娘孫王の君たちによつて次のように噂されている。

孫王たちは、物語す。姉君、「我が宮は、なほや、この下臈の娘を、『上』とは思はらむ」。中の君、「さらなることかな。

一日、それより来たりし人に問ひしかば、ある人、『春宮に候ひ給ひこそ、九の君とは申すめれ』と言ひければ、捕らへて、いみじう打たせ給ひて、下に籠められければ、さらに、受けて言ふ人なかなか。限りなくかしづきてぞ置かれたる」。姉君、「あなものの狂はしや。人聞きこそ、やさしけれ。『御方のおとどや、かやうのこと聞き給ふらむ』と思ふこそ、面恥づかしけれ」。中の君、「さらなることをものたまふかな。言種にて笑ひ給ふものを。『かの親王の御子にて、そこたち、いかで、かうだにあらむ』とのたまふ」など言ふ。〔国譲上・661〜662頁〕

また一族が恩赦された滋野真管は、かつて忠澄(正頼長男、あて宮兄)の乳母を仲間にし、あて宮付き女房の殿守を買収していた。三春高基もまた、あて宮付き女房に「大きな衣箱二つに、麗しき絹・畳綿などを入れて」渡し、買収した(藤原の君・90頁)。買収や略奪計画で構成される祐澄と近澄の女二宮略奪未遂事件は、(あて宮求婚譚)における三奇人の暴力性と極めて類似しているのである。

また祐澄と近澄の色好みは兼雅を連想させる。実は祐澄は(あて宮求婚譚)の時、兼雅とあて宮を仲介しており、兼雅とは密接な繋がりを持つ人物である。さらに兼雅と祐澄は、自分の妻である皇女を蔑ろにしているという共通点を持つ。兼雅は女三宮を、祐澄は梅壺更衣の皇女を冷遇し、嵯峨院の嘆きをかけているのである(蔵開中・539頁)。近澄も色好みとして登場し、先述したように兼雅によつて称賛されている。兼雅の色好みは、朱雀帝によつて「右大臣は、有様・心もかしこけれども、女に心入れて、好いたる所なむついたらる。さるべき人は、頼もしげなくなむある。」(国譲下・752頁)と難じられる。近澄の色好みも大宮の心労の元となつており、色好みの負の側面を持つ人物たちとして類似しているのである。

祐澄と近澄は、(あて宮求婚譚)の負の部分を継承している存在といえるのである。一方であて宮の求婚者たちが救済されながら、他方で(女二宮求婚譚)が勃発することは、両者の相関性を窺わせる。また、女二宮自身もかつてのあて宮と比較される。

「いさや、かの二の宮を、五の皇子の、世を世ともし給はず、帝・后も物聞こえ給はぬ人の、『いかで取らむ』とのみし給ひて、『まかで給はば、ともかくもせむ』とのみあれば。里にも、え避らぬ、『人知れず盗まむ。入らむ』とのみあれば、それに怖ぢて、えまかで給はぬぞや。藤壺の、さばかりののしられ給ひしかど、情けづき、人の御返り言、申すべき、えすまじきは、さてこそ、あらまほしくしてし給ふなりしか。これは、もの

騒がしくぞあるや。』さては、得ぬもの』と、懲りにたるにこそはあらめ。『さてのみあらむやは』とて、明日ぞ、これかれ、大事して迎へ奉り給ふべかなる」

〔國護下・804頁〕

仲忠は、あて宮が求婚者たちに返事をするかどうか的確に判断していたと振り返り、女二宮の落ち着かない様を指摘する。両者の比較は、そのまま（求婚譚）の比較にもなっているのである。かつての（あて宮求婚譚）で仲介役という脇役だった祐澄は、新たに近澄を加えて（女二宮求婚譚）で主役へと変貌を遂げたといえよう。

四 正頼一族の驕り

祐澄と近澄は正頼の息子たちである。しかも物語前半部においては高い評価を受けた貴公子であった。その祐澄・近澄が実は暴力性・好色性を内に秘めた危険な存在であるということは、正頼一族にとって憂うべき事実である。正頼一族は、（あて宮求婚譚）によって最も有望であった仲澄を失う。そしてまた（女二宮求婚譚）によって祐澄・近澄に対する世間の信頼を失うのである。もはや仲忠が二人を信用することはないだろう。正頼一族は、後継者をまた二人失ったのである。

正頼には忠澄という長男もいるが、忠澄の影は薄い。物語前半部では正頼に指示されて神楽の準備を取り仕切るなど（嵯峨の院・178頁、祭の使・216頁）正頼の後継者としての成長が期待された。この時忠澄は左大弁（従四位上相当）であり、仲忠の侍従（従五位下）

を上回っていた。しかし沖つ白波巻では仲忠が中納言であるのに対し、忠澄は権中納言である。そして衛門督は兼任するものの楼の上巻まで権中納言であり、内大臣になろうかとする仲忠に大きく差を付けられている。

正頼には十二人もの息子がいるが、一族の将来には驕りが見える。これは、正頼の次に台頭するであろう源氏、源涼への交代が迫っていることを示すものなのかもしれない。ただ正頼にはまだ宮あこ君・家あこ君という幼い息子たちが控えている。この二人が残されているということが、正頼一族のわずかな望みであるといえる。

おわりに

物語世界は、後半部になって（あて宮求婚譚）というかつての悲劇を修復しにかかった。しかしそこに新たな事件（女二宮求婚譚）が勃発する。これはかつての（あて宮求婚譚）の暴力性・好色性といった負の属性を引き継いだものといえよう。しかし祐澄・近澄という貴公子によって企てられたという事が、かつての三奇人による狂態よりも陰湿化した事件であることを物語っている。しかも二人はあて宮の兄弟である。祐澄は裏で画策しながら表面上は無関係を装う。しかも計画が未遂に終わった翌朝、何喰わぬ顔で仲忠の前に姿をあらわすのである。

つとめては、つれなくて、皆（＝祐澄と近澄）出で来たり。

大将、見合はせて、「いとをかし」と思ひたれど、いとまめや

かにて、気色いと悪しくて、宰相の中將居給へり。

〔国譲下・806～807頁〕

仲忠は、二人の行動をすべて見切っている。仲忠の信用を失った二人がこの先榮進していくとは思われない。正頼一族は、あて宮によって多くの男たちの悲劇を生んだ。悲劇の修復は、順調に進んでいるかにみえる。しかし一方で今度は自分の一族の者が、新たな悲劇を生み出していく。女二宮はまだ裳着をすませたばかりの幼い姫宮である。(あて宮求婚譚)を引き継いだ(女二宮求婚譚)は、更なる発展の可能性を秘めているといえよう。

前稿⁽⁵⁾において、宮の君と小君が(国譲)の負の主題を背負って登場し、将来の不穏を感じさせる人物たちであることを論じた。祐澄と近澄についても、(あて宮求婚譚)の負の側面を受け継ぎながら、新たな世界を構築していく担い手である。このように、前半部の主題の一面を後半部で新たな形で描き直すという(繰り返し)の方法は、長編『うつほ物語』の後半部を前半部と繋ぎつつ、より重厚にしていく要因の一つであるといえるのである。

〔注〕

(1) 女一宮は長男宮の君を難産で出産する。俊隆一族に新たに加わる男子の誕生としては異例の事であり、将来一族の間に亀裂を齎す可能性を感じさせる。これは次世代の(国譲)において再び確執が繰り返されるであろう事を予感させる。詳しくは拙

稿『うつほ物語』宮の君と小君——次世代の確執——(古
代中世国文学) 18 平14・12 広島平安文学研究会) 参照。

(2) 加藤昌嘉氏『うつほ』の仲澄——作物語の手法と指向——(詞林) 32 平14・10) は、Bの部分をあて宮思慕にとり、この段階ではあて宮に思いを寄せる新たな存在者として祐澄が布置されたとしておられる。氏の指摘する女一宮への「かの君」呼称は確かに不審であるといえるが、「かの君」をあて宮と断ずるにはやや疑問が残る。物語中祐澄があて宮に懸想していた事実はなく、「心一つに思す」あて宮思慕の発展も窺われないからである。またBとbとの対応についても氏は言及されていない。本稿では語の不審はあるものの、前後の繋がりがから女一宮を指すと解した。今後も課題として考えたい。

(3) 前注(2)の加藤論文。

(4) 野口元大氏「蔵開」と「国譲」の世界(『うつほ物語の研究』昭51 笠間書院)は、兼雅と交代するかのよう出現する人物として近澄を比定される。

(5) 前注(1)の拙稿。

*『うつほ物語』本文の引用は、『うつほ物語全 改訂版』(室城秀之氏校注 平7初版・平13改訂版 おうふう)に拠り、一部私に傍線や注記等を施した。なお引用末尾に巻名および頁数を示した。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院研究生——